

奏効率は88%であった。最終追跡時点で（平均追跡期間34ヶ月）での生存率は、69%であった。また、生存例のQOLはいずれも良好であった。死亡例は、治療が奏効しなかった2例と再発の3例であった。本プロトコルは、髄芽腫に対して有効である。特に、中枢神経系への放射線照射が禁忌である乳幼児に対する補助療法として期待し得るものである。

B-39) 中枢神経系悪性リンパ腫の治療成績と問題点

片倉 隆一・鈴木 洋一（宮城県立がんセンター 脳神経外科）
松本 恒（同 放射線科）
吉本 高志（東北大学 脳神経外科）

【目的】我々は中枢神経系悪性リンパ腫に対し、定位的生検後化学療法としての ACNU 3-Vessels 動注療法と放射線療法の併用療法を初期治療として行ってきた。今回は、本療法を行う上で問題と思われた点について報告する。【対象, 方法】対象は、過去4年間に本療法を行った Bcell lymphoma 17例である（平均年齢57.2歳）。ACNU を両側内頸動脈（C2）及び椎骨動脈 100 ~ 150 mg/m² 投与後、放射線療法として全脳30 ~ 40 Gy, 局所10 ~ 20 Gy 行うプロトコルとした。ステロイドホルモンは、治療初期一時的に使用した。【結果】本療法の MRI 上の効果は、CR 15例, PR 2例で有効率は100%である。しかし、4 ~ 46m の追跡調査では既に6例で再発（1 ~ 16m）、4例が死亡（6m, 13m, 18m, 28m）している。MRI 上の再発部位は、局所再発2例、遠隔再発4例で、早期再発例では、40 ~ 50 Gy の照射野から再発していた。【結語】本療法後の再発例の検討と、他臓器の悪性リンパ腫との比較から、本疾患の病態上の問題点を考察する。

B-40) 脳神経外科患者における肺塞栓症の検討

佐藤 光夫・佐藤 拓
石川 敏仁・紺野 豊（福島県立医科大学）
佐々木達也・児玉南海雄（脳神経外科）

【目的】脳外科周術期合併症のひとつである肺塞栓症（pulmonary thromboembolism, 以下 PTE）について報告する。【対象と方法】PTE 15例を対象とした。年齢は46 ~ 77歳（平均63歳）で男性6例、女性9例である。基礎疾患、診断までの経過、治療と転帰について検

討した。【結果】1) AN, 脳腫瘍, ICH の術後が各々4例, dural AVF の塞栓術後2例, AVM の術後1例である。2) 下肢の腫脹を伴う deep vein thrombosis (以下 DVT) が術後10 ~ 21日目に出現した6例では肺血流 scintigram などで PTE と早期診断し得た。一方、6 ~ 85日目に突然の呼吸症状で発症した9例は、肺動脈撮影や剖検で PTE と診断した。このうち5例は片麻痺などのため14 ~ 120日間 bed rest の状態にあった。3) DVT と診断した6例では患肢のバンデージ、低分子ヘパリンの投与、下大静脈へのフィルター挿入により DVT と PTE は改善した。突然発症した9例中6例は死亡したが、3例は低分子ヘパリンなどの投与により回復した。【結語】脳外科周術期において、突然発症型の PTE の予後は不良であった。Bed rest や片麻痺を有する患者では DVT や PTE が潜在している可能性を念頭に置き、早期診断、治療にあたるのが重要である。

B-41) 中頭蓋窩に発生した Capillary hemangioma の一例

渡辺美喜雄・箱崎 誠司（盛岡赤十字病院）
久保 直彦（脳神経外科）

症例は8歳、男子。持続する頭痛を主訴に来院。単純 CT にて左側頭葉に広汎な低吸収域を認め、増強 CT にて中頭蓋底に接した直径約2 cm の境界明瞭な環状造影される mass を認めた。MRI では、T1で mixed, T2で high intensity を呈しており、CT と同様な造影効果を認めた。脳血管撮影では、anterior temporal artery より造影される腫瘍血管を認めた。subtemporal approach にて腫瘍摘出術を施行した。腫瘍は硬膜に付着しており、脳実質との境界は明瞭であった。付着部の硬膜を含め肉眼的に全摘した。術後、患者の症状は消失し、神経脱落症状なく退院した。病理組織診断は capillary hemangioma であった。本腫瘍の中枢神経系での発生は稀であり、文献的考察を加え、報告する。